
鈴の音は聖夜に響く

氷雨水夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音は聖夜に響く

【Nコード】

N1455J

【作者名】

氷雨水夜

【あらすじ】

メリークリスマス。聖なる夜はみんなが幸せという訳ではない。これは、毎年クリスマスを喜ばない少年の、いつもと少し違うクリスマス話。

(前書き)

この内容はジャンルと違うかも W W W

それに相変わらず意味不な駄文なのは変わらないよ！。

あ、ケーキ旨ー☆

――五月蠅い。世界は喧騒に満ちている。

ただでさえ騒がしいのにさらに五月蠅くなるこんな日なんて……

――……クリスマスなんて消えてしまえばいい。

12月25日、世間はChristmas気分染まっている。

すずはらゆきと

鈴原雪斗は17歳最後の日であるにもかかわらず、クリスマスも、誕生日にも興味がなかった。

「……バカなやつら」

街中に溢れるカップルたちを見て1人呟く。

さらに歩を進めると、家族連れだろうか、女の子が店のショーウィンドウを指差して両親らしき二人に笑顔を向けている。

「お母さんっ！お父さんっ！これが欲しいのっ☆」

「なら今夜いい子にすればサンタさんがプレゼントしてくれるはずだよ」

「ほんとっ？ならいい子にしてるっ！」

興奮したのか白い息を弾ませて言っていた。

――サンタ、か。

何でもプレゼントしてくれるおじいさんなんて存在しないのに。

近くのベンチに座ると、そう心の中で呟いた。

雪斗は幼いころから誕生日とクリスマスのプレゼントと一緒にされてきた。別に今現在は家が貧乏だと言うことを知っているのも、その点に関しては文句は無いが。

サンタからのプレゼントだって、父親がサンタの代わりに部屋に置いて行ったことを知っていた。ふと夜中に目が覚めて彼が居たことがあったからだ。父の手に大きな傷があり、夜中の男にも同じ傷があったから、あれは間違いなく父。サンタは親なのだという現実を知ってしまった。

それからというものの、毎年のようにクリスマスになると不幸の連続だった。5年前には誕生日の前日に親が亡くなるということもあった。

雪斗にとってクリスマスなんて、いい思い出が全くない。

「……お兄ちゃん……どうしたの？」

先ほど店前にいたはずの少女が話しかけていた。

「……ううん、別に何でもないよ。君こそ、お父さんやお母さんは？」

「なんかね、待っててって。サンタさんをお願いしてくるからって」
きつと彼女の両親はサンタからのプレゼントを買いに行ったのだろう。

「だから、ひまだったの。そしたらお兄ちゃんが泣いてたから、どうしたのかなって」

「え……?」

「……泣いてい……た？」

頬に手を伸ばすと温かな雫に触れた。

どう……して？

——突然、記憶が過去を映し出した。

——……

「どうして、どうして！！誕生日と一緒にしないでよ！！！」

「坊や、何を泣いているんだい？」

「お父さんもお母さんも、クリスマスと誕生日のプレゼント一緒にするの。一緒にヤダなのに……」

「それならワシからプレゼントを上げよう」

「……いいの？」

「ああ、いいとも。ただし、誰にも内緒だよ？あと、一緒に入っている手紙は大きくなったら読んでほしいんだ」

「うん、わかったよ！」

「じゃあ……約束だ」

「うん！！！」

あのまだ自分が小さい時、この聖夜に話したおじいさんは……

確か赤い服を着て、大きな袋を背負って……——

手に大きな傷があった。

……まさか……

「……ちゃん？お兄ちゃん？」

呼びかける声に雪斗はハツとなる。

「……大丈夫？」少女は心配そうに顔を覗きこんでいる。

「平気、だよ。……あ、今出てきたのは君のお父さんたちじゃないかな？」

「本当だー！それじゃあお兄ちゃん、またねー！！」

手を振って、親の元へパタパタと走り出して行った。

雪斗はそんな少女を見送ると、自分も家の方へと駆け出した。

——自宅。

雪斗は家に帰るなり机の引き出しの中身をあさる。

……あつた。

貰った手紙は大事に保管されていた。……もつとも、入れて置いて忘れていたとも言うが。

あの時、プレゼントにはクリスタルのペンダントが入っていて、同じ箱に入っていた手紙は言われた通り、読まずに置いておいたのだ。

雪斗はその手紙を開く。内容よりも、綺麗な丸っこい字と模写かと思うほどの達筆な字の二種類の字が目に入る。

これは、亡くなった母と父、二人の字だ。

交互に書いたのだろうか。途中まで父が、後半は母が書いているようだ。

『雪斗、この手紙をいつ読んでいますか？もしかすると父さんと母さんはもうこの世にいないのかもしれないね。（中略）こんな手紙の時点で、あのサンタさんが誰なのか察しはついていると思います。父さんも母さんも不器用で、今までちゃんとクリスマスプレゼント

ントを上げてなかったものだから、素直に渡すことが出来なくて……。ごめんなさい。だけど、これだけは心に留めていてほしいの』

……留めていてほしいこと？

『貴方はこの先、何を見、何を問うのでしょうか。全て己で考えるのです。想いが希望となりますように』

『贈り物とは違って、望みのサンタなど来てはくれません。願いは誰も叶えてはくれないのです。己が行動を起こしなさい。その望みが現実となりますように』

雪斗はこの言葉の真意がわからなかった。それなのに涙がボロボロとこぼれ落ちていく。

何を心に記憶していいのか理解できていないはず。だけど、雫は止まるどころかあふれていく。

これは何年も気付かなかった自分への惨めさに対してなのか、親なりの子供への愛情に対してなのかもわからない。

鈴原雪斗は雪の舞う外を見て、毎年呟いている言葉を言う。今年ばかりは少し意味が異なるようだったけれど。

「やっぱり、クリスマスは大嫌いだ」

彼の表情はどこか温かみがあった。

(後書き)

ホントは日付が変わる前に投稿したかった……
クリスマス企画と思って書いたやつだったから……

本当に駄文でサーセン(泣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1455j/>

鈴の音は聖夜に響く

2010年12月25日18時26分発行